

令和 3 年 6 月 24 日現在

機関番号：32101

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2020

課題番号：18K13064

研究課題名（和文）「～し直す」行為の成長モデルに対する批判的検討：レヴィナスの他者論から

研究課題名（英文）Critical Study of the Growth Model Characterized by "Redoing": From Levinas's Theory of the Other

研究代表者

安喰 勇平 (Anjiki, Yuhei)

茨城キリスト教大学・文学部・講師

研究者番号：20802862

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,200,000円

研究成果の概要（和文）：子供の成長や教師の成長を説明するために、近年では「～し直す」行為の成長モデルがしばしば用いられる。本研究はこの成長モデルに潜在する問題点と、その問題点を克服する方途を提示した。この成長モデルは繰り返し反省することによって、徐々に成長していくという筋立てを前提としている。本研究は、この前提における反省と成長との連続性が不確かであることを問題点として指摘した。そしてこの問題点を克服する方途として、読者に反省を促す論述方法の工夫の必要性を提示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

「～し直す」行為の成長モデルは、現代の教師教育や道徳教育の領域で普及している。この成長モデルは、教育学における他者論の研究成果から強い影響を受けている。本研究は、教育学における他者論に潜在する問題として、論じる内容と論じる方法の間の自己矛盾の事態を提示した。この自己矛盾の事態は、他者論が批判しようとしていた対象を時として強化しかねない。この問題を克服するために、語られた字義通りのコンスタティヴな意味だけでなく、パフォーマンスな意味に着目した論述の必要性を提示した。

研究成果の概要（英文）：In recent years, the growth model characterized by "redoing" is often used to explain the growth of children and teachers. This research presented the potential problem with this model and the way to overcome the problem. This model presupposes the plot that we can grow by reflecting repeatedly. This study pointed out that the continuity between reflection and growth is uncertain. And, it presented the need for a arguing method that makes readers reflect.

研究分野：教育哲学、道徳教育

キーワード：教育学における他者論 レヴィナス 語り示しの実践 誇張法

1. 研究開始当初の背景

近年の教育学において「～し直す」という行為は、教える者の持つべき倫理的態度のあり方を示唆する行為として、また学習者がそれまでの考え方を見直し、新たに学び直す行為として注目されている。に関しては、例えば、潜在的な他者性に出会うことの余地を残しつつ、自らの認識枠組みを超えて学習者を認識し直せる技術の要請を促す研究がある。また、に関しては、自身が学んできた知識や価値観の限界を認識して、新たな知識や価値観を学ぶ重要性を説く研究がある。この両ケースが前提にしているのは、これまでの価値観や学んできた知識が部分的に誤っていることに気づき、それを更新することを通して、より適切な価値観や知識を身に付ける、という成長モデルである。

しかし、以上の成長モデルには、ある理論的困難が内在していると批判されている。その理論的困難とは、自分自身の限界を認識することを通して、倫理的あるいは技術的に卓越した自己へと至るという道筋が、ややもすると既存の自己の温存に帰結しうる、というものである(内田樹『ためらいの倫理学』角川文庫、2003年)。自己の限界を認識することが、その自己の成長を導くとは言い切れない、という理論的困難が指摘されているのである。なお、この指摘はエマニュエル・レヴィナス(E. Lévinas)の他者論に基づいて導出されている。そこで本研究は、レヴィナスの他者論に着目することで、「～し直す」行為の成長モデルの理論的困難の原因を明らかにし、かつ、その困難を解消するための方途を提示しようとした。

2. 研究の目的

以上の背景を踏まえ、本研究は、「～し直す」行為の成長モデルを批判的に検討することを通して、そのモデルの理論的困難の原因と、その困難を解消するための方途を明らかにすることを目的とした。

3. 研究の方法

本研究がまず焦点を当てたのは教育学における他者論である。「～し直す」という行為の成長モデルは、教育学における他者論に基づいて提示されてきた。特に教える者の成長モデルはその様相が顕著である。教育学における他者論の諸研究は、自らの認識枠組みを超えて学習者を認識し直すことや、学習者に固有の経験の在り方を問い直し続けることの重要性を提示してきた。それら研究に共通しているのは、教える者の認識の限界を前提としている点、またその認識の限界を知った上で他者を承認することへと至ろうとしている点である。

「～し直す」という成長モデルは、絶えざる反省や認識枠組みの更新という理念の重要性を前面に出し、かつ、他者を承認することの可能性をその理論的射程に入れている。ただ、「～し直す」成長モデルを理論的に支えている教育学における他者論には、ある問題が付き纏う。それは論じる方法に関する問題である。本研究はこの問題に関する、教育学における他者論の先行研究を整理し、検討することから着手した。この「～し直す」成長モデルに潜在する論じる方法についての問題に関しては、次節「4. 研究成果」にて詳述する。

教育学における他者論の論じる方法の問題を克服する仕方を検討するにあたって、本研究は、エマニュエル・レヴィナスの他者論を手掛かりにした。レヴィナスの他者論は、伝統的な西洋哲学で顧みられなかった(顧みられたとしても、レヴィナスからすれば、十分でなかったとされる)他者の尊重を主張し、認識作用や知覚作用によっては捉えられない他者の特権的な位置付けを示したことで知られる。また、そこでは、他者を尊重しつつかわる、倫理的な自己のあり方が描かれている、と言われる。自己と他者との関係の倫理について論じたレヴィナスは、それら内容面だけでなく、他者を論じるための方法を工夫したことで知られる。内容面と方法面の両面に関する諸工夫が施されながら編まれたレヴィナス他者論は、本研究において妥当な参照項である。

4. 研究成果

研究成果は以下の3点にまとめられる。

(1) 教育学における他者論の論じる方法の問題：自己矛盾の事態

本研究は、斎藤直子と丸山恭司の議論の検討を通して、教育学における他者論の論じる方法の問題を、自己矛盾の事態として提示した。教育学における他者論において、自身の認識枠組みを超えて他者を認識し直し続けることが必要であると主張をすることは、より強靱な認識の力を前提とした論述方法を用いることにつながりうる。すなわち、教育学における他者論は、批判しようとしていた当の内容を前提にした論述へと化す可能性、言い換えれば、論じる内容と論じる方法との間の自己矛盾の事態に陥る可能性に付き纏われている。この自己矛盾の事態は、単なる修辞上の問題に留まらない。自己矛盾の事態は、教育学における他者論が批判しようとしていた自己の枠組みを温存しつつ、より強靱なナルシスティックな自己への組み代えを帰結しかねないのである。

教育学における他者論の自己矛盾の問題は十分に探究されてきたとは言い難い。それゆえ、

「～し直す」成長モデルのうちにも同型の問題がなお潜在している。すなわち、「～し直す」成長モデルにおいて、「～し直す」前の状態を捨てたり、忘れたりして、別の、新たな状態に移行したつもりが、捨てたり、忘れたりしたかった当のものが残存し、密かにより強力になっている、ということがあり得ることを明らかにした。

(2) 自己矛盾の事態を克服する方途 : 誇張法

レヴィナスは自己矛盾の事態を避けるために、自身の論述の中で、語られた字義通りのコンスタティヴな意味を示すだけでなく、読者に対するパフォーマンス効果(その内容を論述することそれ自体によって遂行される効果)を狙っている。レヴィナス自身は、そのパフォーマンス効果について積極的に論じてはいないが、彼の論述のうちにその効果を読み取る論者たちは、その根拠として、レヴィナスの用いる方法「誇張法」を挙げる。

レヴィナスの誇張法(例えば、「代償なしで我慢すること」あるいは「他者によって付き纏われること」)は、その記述が文字通りの意味で解釈され、その記述が現実化される時、迫害や錯乱という病的な形態を示す。レヴィナスの誇張法は、現実の生に即した多くの場合で、過剰である。その意味で、レヴィナスの誇張法は、規範的な機能を有しているとはいえない。そうではなく、レヴィナスの誇張法は、過剰な性質を通して、主体と知覚しがたいものとの関係を「あたかも……であるかのように」(comme si)という形態のもとで創設する。過剰な性質を語ることを通して、読者の既存の認識枠組みを反省させ、さらに読者がこれまで感知することのできなかつた方向性をレヴィナスは提示していると言える。以上の意味で、ピエール・アヤが論じるように、レヴィナスの誇張法のうちに「批判的反省的機能」を見て取ることができる。そして、ここにレヴィナスの論述が読者にもたらすパフォーマンス効果の核心があると結論した。

「批判的反省的機能」を備えたレヴィナスの誇張法による論述は、自ら決意して自身の認識枠組みを問い直そうとすることを読者に求めるといよりはむしろ、反省に迫られる契機を読者にもたらすことを企図している。このような意味で、他者論の自己矛盾の問題を超える一つの方途をレヴィナスの誇張法のうちに見て取ることができよう。

(3) 自己矛盾の事態を克服する方途 : 中断の結び目の集列

レヴィナスが自身の論述方法に主題的に言及する機会は少ない。そこで本研究は、レヴィナスの論述の特質に着目したジャック・デリダの論考「この作品の、この瞬間に、我ここに」に着目した。この論考の中でデリダは、他者論の自己矛盾の事態を克服する方途をレヴィナスのテキストのうちに見出している。デリダは、自己矛盾を避けるように他の仕方で読者に読ませる企てを、レヴィナスのテキストのうちに見取っているのである。その際、デリダが着目するのはレヴィナスの中断に関する論述である。レヴィナスは、存在することに還元できない要素を論じるために、存在することの中断の重要性を説く。しかしながら、存在することの中断を論じる場合、その論述自体が「である」(être)という存在を意味する言葉を前提として行われざるを得ない。ここに自己矛盾の事態が生じる。

デリダは、テキストの中で中断について論じつつ、かつ、テキストそれ自体を中断させるような契機を断続的に繰り返すことによって、自己矛盾を避けるように読者に他の仕方で読ませる企てが可能になると説く。デリダは、レヴィナスの中断を「切り裂き」と比喩的に捉えることで、レヴィナスのテキストが切り裂かれつつも、その切り裂かれた部分が途端に結ばれていくことで幾つもの結び目が残存すると見なす。そして、その中断の結び目が繰り返しテキストの中に修復されることで、連なってゆく中断の結び目と、その結び目と結び目の間隔によって構成されるレヴィナスの著作の構造をデリダは「集列」と称する。本研究は、このデリダのレヴィナス解釈を踏まえ、レヴィナスのテキストが、中断という表現で語ろうとしている事柄を、中断の結び目の連なりとしての集列を組織する事で語り示そうとしているものだと示唆した。レヴィナスは自己矛盾しながらでしか語るることのできない事柄を、幾度も規則的に語り出すことを通して、中断の結び目の集列構造をテキストに作りだしていた。このようにテキストを理解すれば、中断についての語りのうちに自己矛盾の事態が生じるということに対する新たな肯定的な観方が可能になるだろう。レヴィナスのテキストのうちに見取れる「中断の結び目の集列」は、語り示しの実践という教育哲学の理論的実践の一つの可能な在り方だと言えよう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 安喰勇平	4. 巻 65(2)
2. 論文標題 成長の契機としての中断について：レヴィナスの眠りと目覚めに関する論述の検討から	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 教育学研究紀要（CD-ROM版）	6. 最初と最後の頁 511-515
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 安喰勇平	4. 巻 87(1)
2. 論文標題 「～し直す」成長モデルに関する批判的検討：教育学における他者論の自己矛盾の問題に焦点を当てて	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 教育学研究	6. 最初と最後の頁 13-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11555/kyoiku.87.1_13	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 安喰勇平	4. 巻 30
2. 論文標題 企画趣旨（コロキウム 語り示しの実践としての教育哲学研究の可能性：レヴィナス、デリダ、ドゥルーズから）	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 近代教育フォーラム	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 安喰勇平	4. 巻 30
2. 論文標題 中断の教育学の中断（コロキウム 語り示しの実践としての教育哲学研究の可能性：レヴィナス、デリダ、ドゥルーズから）	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 近代教育フォーラム	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 安喰勇平
2. 発表標題 成長の契機としての中断について：レヴィナスの眠りと目覚めに関する論述の検討から
3. 学会等名 中国四国教育学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 安喰勇平
2. 発表標題 中断の教育学の中断と修復（コロキウム 語り示しの実践としての教育哲学研究の可能性：レヴィナス、デリダ、ドゥルーズから）
3. 学会等名 教育思想史学会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 安喰勇平	4. 発行年 2022年
2. 出版社 春風社	5. 総ページ数 336（予定）
3. 書名 レヴィナスと教育学：他者をめぐる教育学の語りを問い直す	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------